



「開発学を学んで」

森畑 真吾

貧しさを研究する学問

日本は高度経済成長期・バブル経済を経験し、本当の「豊かさ」とは何か？が問われています。一方で、私たちは普段から「貧しさ」を真剣に考えたことがあるでしょうか？世界の約半分がこの「貧しさ」に苦しんでいるとすれば、「国際」を理解する視点を養う国際理解教育において、貧しい国々に関する理解は、一つの重要なファクターであることは間違いありません。では、この貧しさを研究する「開発学」とはどんな学問なのでしょう？簡単に言ってしまうと、今日開発途上国とされている貧しい国々がなぜ貧しいのか？いかに経済発展を遂げるか？を経済学の理論だけではなく社会学、文化人類学などの視点を用いて政策提言を試みる社会科学です。「実践的な問題意識によって支えられた政治経済学」とも評されるこの開発学は、植民地時代にインドなど多くの植民地を有していたイギリスなどで、経済学と並んで地位が確立されつつあり、盛んに研究が進められています。

「経済学」と聞いて顔をしかめる方は少なくないと思いますが、実は大学4年間その経済学を学んだ私もその一人でした。いわゆる近代経済学といわれるマクロ・ミクロ経済の理論は、現状分析をするうえでの鋭い「武器」であり、様々な経済統計算出の基礎となります。が、これら計算を主体とする手法のみにかじり付いて、どこまで現状

に近づけるのか？という疑問は、素人目ながら学生時代から感じ続けてきたことでした。今振り返ると、この「経済学」に対するなんだかよくわからないけれど感じていた疑問が、イギリスで「開発学（Development Studies）」を学ぶ根底になっていたように思います。

貧困を考察する経済学者、セン教授

私がイギリス・ロンドン大学への留学を決めたのは、大学を卒業した春のことでした。ロンドン大学のなかでも私が通った東洋アフリカ研究所（School of Oriental and African Studies ; SOAS）は、中東を含むアジアやアフリカ諸国の言語・文化・地域研究に関して、イギリスでも学習機会の揃った大学と言えます。修士課程では、短期間に多くの課題論文の提出が要求され、めまぐるしく変わる毎週のトピックに関して提示される山のような参考文献を図書館から借りてはコピーし読みこなすという毎日があっという間に過ぎ去っていきました。開発学で取り上げられる主要なトピックである人口問題、農業・食糧問題、ジェンダー、植民地時代の政治的・経済的な負の遺産など、一国の開発（経済発展）の妨げとなる多様で相互にからみあった問題を多く抱えた国インドを研究テーマに選択し、気が付けば「インドの農業・貧困政策と経済自由化政策」と題した修士論文を提出し、嵐のような1年が過ぎていました。

著名な開発経済学者の一人であるアマールティア・セン（Amartya K.Sen, 1933— インド出身）がノーベル経済学賞を受賞したのは1998年のことでした。既存の経済学を批判し、新たな視点で貧困を考察した学者がノーベル賞を受賞したのは、これが初めてのことです。著書のなかで彼は、「極貧から施しを求める境遇に落ちたもの、かろうじて生延びてはいるものの身を守るすべのない土地なし労働者、昼夜眠なく働

き詰めで過労の召し使い……かれらの窮状は平穩無事に生延びるために必要な忍耐力によって抑制され覆い隠されて、（欲望充足と幸運に反映される）効用のものさしには、その姿をあらわさないものである。（引用：「福祉の経済学」アマールティア・セン著、鈴木 興太郎訳 岩波書店、1988年）」と述べています。つまり、本当の貧困層とは、市場メカニズム機能を前提とする経済学の既存概念の外にあって、彼らを認識する為には新たな視点（ケイパビリティ・アプローチ）をもって取り組む必要があるという主張です。

柔軟な視点・価値観を養って

私は「開発学」を通して、今までの「常識」に疑問をもち再構築を試みることで、新たな視点・価値観を得ることを学びました。現在、社北方圏センターの職員として、国際協力事業団（JICA）の北海道国際センター（札幌）の管理運営の一端に携わっています。

国際理解教育の重要性が叫ばれるにつれ国際協力への関心も高まり、その現場であるJICAの施設を見学に来る小・中学生の数も増加傾向にあります。施設案内の途中で、海外からの研修員に対し「ハロー！」と気さくに声をかける小学生の眼差しからは、言葉の壁など感じさせない好奇心に裏付けられたコミュニケーション能力を感じることができます。また、多くの国際協力関連書籍やJICA出版物を有する図書資料室（センター内2F）にも、日中から資料を探す大学生の姿も見られるようになってきました。北海道国際センターで開催されてきた「国際協力に関する大学合同合宿ゼミ」も今夏で3回目を迎え、札幌近郊の国際協力を研究する大学生・大学院生による実行委員会が中心となって打ち合わせを重ね、企画から実施を目指し準備を進めています。国際化という大きなうねりの中で、小学生から大学生までそれぞれの「国際理解」が進んでいるようです。これまでの「常識」にとらわれることのない彼らの柔軟な視点・価値観こそが、今後の北海道の国際化を推進する原動力となっていくものと考えます。

（社団法人北方圏センター

札幌国際センター職員）



「大学合同合宿セミナー」実施について打ち合わせをする実行委員会メンバーの学生たち